Series of the Ticket
シリーズ・ザ・チケット

パラレル

108

Series of the Ticket
シリーズ・ザ・チケット

パラレル

6

restart

108

どれだけ探しても

どうしても間違いが見つからない

ほとほと疲れ果てた私は…

その絵の中の適当なところを指差しました

そして、

「ここに間違いがあることにしよう」

そう決めたんです

そして改めてその絵をよく見ると…

そこに最後の間違いを発見したんです

どうやっても見つからかなった間違いをです

まえがき

お大変お待たせしました。
三年振りのパラレル、第6弾です。

三年と言っても、ついこの間の気もします。

…というか、本当に「ついこの間」なんじゃないの？

てか、本当は三年とか経ってないんじゃ？

…みたいな話が今回は出てきます（笑）。

私たちはついつい、自分自身の感覚よりも客観的な事実と思われ

るものの方を重要視しています。

「こうであるべきだ」

「こうでなければならない」

といった形でです。

そしてこれは望む現実を経験する上で大きな障壁となります。

自由自在なパラレルシフトに対しても障害として作用します。

では、どうやってこれを無効化すればよいのか？

今回は私の実体験をベースに話が進んでいきます。
そしてそこには、パラレルシフトにおける重要なヒントが隠されているはずです。
本編には「間違い探しクイズ」の例が出てきますが、まさしくそういった形で「すぐには気づかない形で」ヒントが盛り込まれています。

一度最後まで読み終えたら、

「まだ私が読み取っていないメッセージが何処かに隠されているかもしれない」

そんなつもりで二回三回と読み直してみてください。

新たな気づきがあるかもしれません。

今回は「ｒｅｓｔａｒｔ」という副題をつけました。
これにも「パラレルシリーズ再始動」というのとは別の意味も含ませています。

その意味とは何なのか？
そこにも関心を持ってみてください。
言語化できない何らかのフィーリングをあなたが感じ取ったのであれば、それがその答です。

それではいよいよパラレル再発進スタートです。

パラレル６　インデックス

まえがき　1

Act.1

透過する風景　17

間違い探し　22
見つからない答　37
予想外の解決法　49
顕現した答　57
パラレルシフトＶＳ潜在意識　62
すり替わった現実　73
意図という案内板　78

多層現実の住人　82

Act. 2

分岐線上の痕跡　97

緊急地震速報　98

シフトしたのはどの時点？　110

隣り合わせの別次元　116

パラレルシフトの気づき方　124

パラレルシフトの三つのポイント　129

別次元という逃げ場　136

パラレルシフトの必要条件　141

掴めない願望　154

Act. 3

望む世界の現れ方 169

ハズレなしの選択肢 170
月は存在しているか 182
特賞は本当に一つか 186
消滅した証拠 193
復活する可能性 201
同列の可能性 206
スマホケースと十万円 214
焦げ目の付いたスマホケース 222
表出した二つの物理現実 232
合致するパターン 240

アジャストされた記憶　243
整合性の放棄　248
自動的パラレルシフト　255
実現頻度　260
エピローグ　272
あとがき　289

Act 1

透過する風景

お久しぶりです。

「ビックリですよ」

何がですか？

「てっきりパラレルシリーズは完結したのかと思ってました」

なんか前回もそんなこと言ってましたよね。

「三年ですよ！三年！いくらなんでも開(あ)きすぎでしょう」

ちょうど三年ぶりってなんか凄くないですか？

「凄くない！あなた前回、

『次作はそう先じゃない』

『数ヶ月後には出る』

みたいなことを言ってましたよ」

言いましたかなあ…。

「なんか歯切れの悪い政治家みたいな口調ですね！

私はてっきり数ヶ月先に出るのか、それじゃなけりゃまた一年くらい先になるのかと思ってましたよ。

そしたらいくら経っても何の音沙汰も無いので、こりゃ遂に終わったんだろうとばっかり思ってました」

でも完結宣言なんてしてませんけど…。

「海外のテレビドラマシリーズなんて、そんな風に突然終了するんですよ」

だから尻切れトンボみたいなシリーズが多いんですよね海外ドラマは。

「そしたら三年ですよ三年！
まさか約三年後に再開するなんて思ってもみなかったですよ」

あなたの既成概念をまた一つぶち壊したというわけですね。

「良いように言うな！」

まあ良いじゃないですか。

…それで、ハーブティーは飲めるようになったんですか？

「いや、私は元々ハーブティーは飲めるクチですよ」

じゃあ言い方を変えましょうか。

あなたの中の次元境界線を何か消去してみましたか？

「う～ん…」

ほら、やってないじゃないですか。

皆そうなんですよ。読むだけで満足してしまって、実際に自分

でやってみようとは思わない。

「どうしてなんですかねえ…」

他人事みたいに。

でも、誰も今の自分を積極的に変えたいとか思わないんですよ。

今は今でなんとか生きていけてるんだから、その範囲から敢えて出たいなんて普通は考えないんです。

「なんでしたっけ。『脳の現状維持プログラム』とかなんとかって言うんですよね。

無意識に変化を邪魔してしまうようになっているみたいな…」

そうです。
でもたかがハーブティーを飲むことが果たしてそこまでの変化ですか？

「う〜ん、人によってはそうなんじゃないですか？」

別にその人にとってハードルの高いことにチャレンジしてみろと言っているわけじゃないんです。
いつもなら二度寝してしまうところを、起きてラジオ体操をしてみるとかですね。
先延ばしにしていることに今取り掛かってみるとか。

「耳が痛いなぁ…」

大したことじゃないんですよ。やってみたら分かります。
それをすることであなたが何か損をするわけでもなけりゃ、普段に比べて著しく疲弊するわけでもない。
でもそれだけのことであなたは頭の中の次元境界線を難なく突破することになる。

「それによって自由度が増すわけですね」

そうです。

「でもですね、そういうのは理屈では分かっていても『じゃあやってみよう』という動機に乏しいんですよ」

動機ですか。

「そうですよ。

『そうすることで自分の中の次元境界線を突破する』と言われて、頭で納得したとしますよ。

でもじゃあそれによって果たして具体的に何がもたらされるのか。

ハーブティーが飲めたとして、それは私の経験上では『ハーブティーを飲んだ』という事実以外の何物でもないわけですよ。

それで背中に羽が生えて大空を自由に飛び回れるようになるわけじゃない。

二度寝をやめてラジオ体操をしたとしても、それは私にとって『早起

きしてラジオ体操をした』ということでしかないですよ。
それ以上の何かを得たという実感はないわけです。
それどころか、
『ラジオ体操をしなかったらもう少したくさん寝ていられたのになあ』
みたいに損をしたように感じちゃいますよ」

なるほどねぇ…。

「私達が新しいことにチャレンジするのは、それで何か得られると思うからじゃないですか。
『これだけの利益を手にできるなら、ひとつ重い腰を上げてやってみよう』とういうようにです。
それ無しで普段と違うことをやるってのは、その人にとってリスクやデメリットの方を殊更に意識しちゃうことになるんじゃないですかね」

動機ねぇ…そうかあ。

「私達がパラレルシフトを切望するのは、日常の延長線上の微々たる変化じゃなくて、それとは無関係にダイナミックに自分の人生を変えてみたいと思うからじゃないですか。
もしそれが出来るなら、どんな努力も厭わないという人は多いと思いますよ。パラレルで読みたいのはそのための方法論なんですよ」

まあお気持ちは大変良く分かります。
でも私はその方法論をずっと書いてきているつもりなんですよ。

「それは分かっていますよ。

『実際にパラレルシフトをするためには、これまでの認識を改めなきゃいけない。変身！みたいに漫画のように一気に現実を変貌させることが本当のパラレルシフトじゃない』

あなたがそう言っているのは分かります」

別に一気に現実が変貌したって構わないんですけどね。

「必要なのは動機ですよ。そして『確かに変わった！』という実感です。それを感じられたら、ハーブティーを飲むだろうがラジオ体操だろうが喜んでやりますよ」

大変良く分かりました。

でもですね、必要なのはまずやってみることですよ。なんでも良いから。

「それは分かってるんですけど…」

よく言うことなんですが、

「何かの証拠が現れたらやってみよう」
「効果が保証されているならトライしてみよう」

これでは順番があべこべなんですよ。

「それは耳にタコが出来るほど聞きました…」

それだと物理現実の範囲内で何かをやろうとしていることに他ならないんです。

でもあなたが望んでいるのは、そういった常識的な物理範囲内の変化ではないわけじゃないですか。

「そうなんです」

ありえない形でありえない事が起きて欲しいと考えている。

「まあ、ぶっちゃけそうです」

なら、これまでの延長線上で考えたりやっていたりしたらダメなんです。

あなたが頭の中で策を練るとするじゃないですか。

「これこれこうやれば、これだけの対価が得られるぞ」

でもこれはあなたの経験値を元に計算を立てているわけです。
要するに従来の概念の範囲から一歩も出ていない。
これがあなたに新規の経験をもたらすことが出来ると思いますか？

「う～ん…」

あなた方はそうやって「事前に何でも把握してなきゃいけない」という強迫観念に翻弄されている。
そのせいで「考えずに動く」ということに対して非常に億劫になってしまってるんです。

「まあ考えずに動くのは正直怖いですね」

パラレル6

2016年11月21日　初版第1刷発行

著者　108
発行　インテグレイテッド・インフォ

©108
All rights reserved

本書は著作権法によって保護されています。
本書の内容を無断で転載、記載することは禁じます。
本書を無断で譲渡・転売することを禁じます。